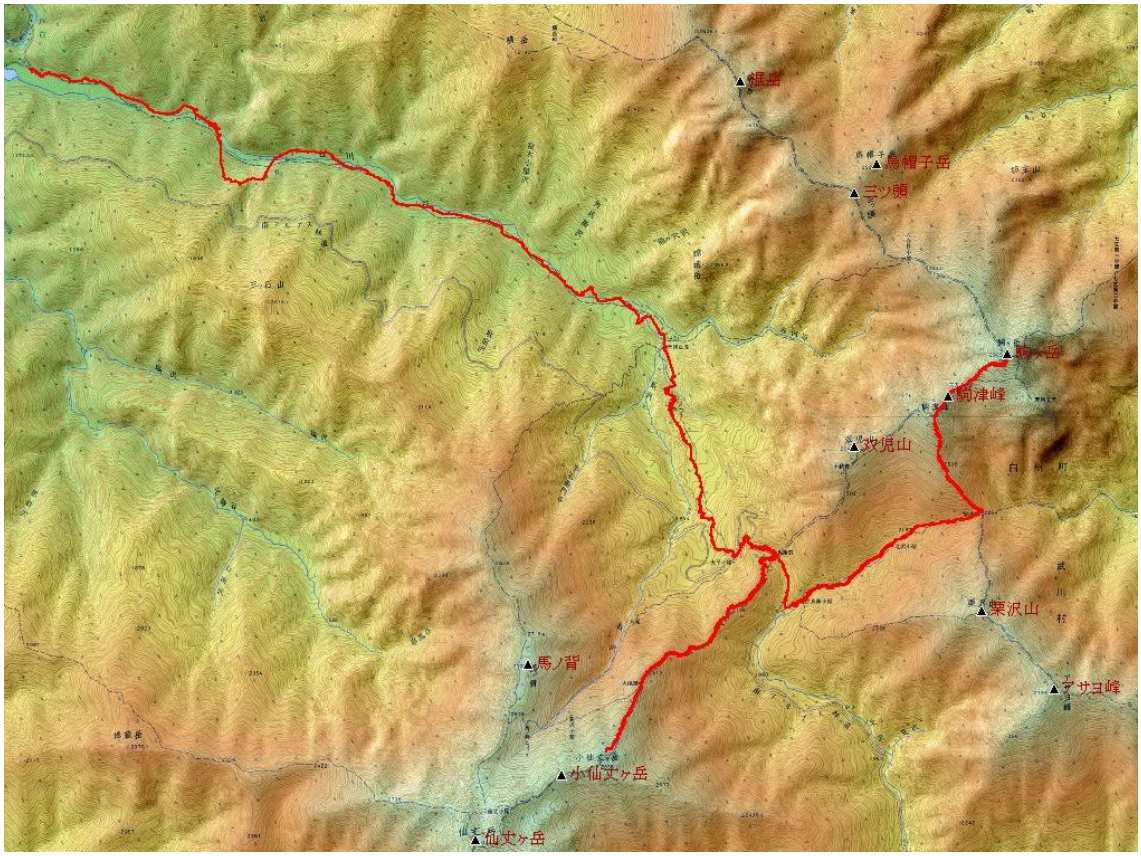
南アルプス　正月山行（甲斐駒ヶ岳）

【日程】2012 年 12 月 30 日～2013 年 1 月 2 日
【エリア】南アルプス
【形態】冬山登山
【メンバー】柳川、太田
【報告】太田



≪ルート／タイム≫
１２月３０日　戸台（9:00）～北沢峠～長衛荘（16:00）（素泊）
１２月３１日　長衛荘（7:00）～小仙丈ヶ岳手前 2800m（11:00）～長衛荘（13:00）
～北沢峠幕営地（15:00）
１月　１日　幕営地（7:00）～仙水峠～駒津峰～甲斐駒ヶ岳（12:00）～幕営地（15:30）
１月　２日　幕営地（8:30）～戸台（12:45）

≪報告≫

１２月３０日

前夜までの２ヶ月の激務を終え、心と体を正月山行にシフトさせる。疲れていないとは言い切れないのに、待ち受ける冬山に自然とテンションが上がっていくのは何故だろう。

冬山幕営は昨年の八ヶ岳（赤岳）以来だ。準備不足の私を配慮してくれてか柳川さんが夕食４日（予備日含む）を用意していただいた。

途中、ゴーグルを忘れて引き返す場面もあり、道の駅で仮眠を取った後、戸台へ着いたのは８時。最初に駐車した戸台大橋で準備作業に入っていると、地元の山親父に誘導され、登山者のための奥の駐車場へ案内していただいた。４０～５０台は十分に入る広さ。

天候は雨。「いつになったら雪に変わるのだろう、標高を稼げばきっと雪に変わるよ」　　こんな期待を口々にしながら、ひたすら河原と堰堤を歩荷する時間が過ぎて行った。久々の２０キロ超の重量は肩にずしりと応える。

丹渓山荘の跡地（1470m）に到着。依然として雨は雪に変わらない。それどころから本降りの様相になってきた。八丁坂を越えたところで防水用のためにアウター手袋を使用していたが、浸水を極め、いい加減に手の感覚が無くなってくる。雪山では雨は基本的に想定されていないから「想定外」の状況といえるだろう。結局のところ大平山荘を越えるあたりまで雪は降らず、アウター、ミドルの上着、アンダーはそれぞれ浸水してしまった。

通しで７時間に亘っての雨攻撃には業に等しくさすがに閉口してしまい、予定調和のごとく現れた長衛荘の明かりにほっとし、ここで素泊を決め込む。

ありがたいことに二階の寝室まで突き抜ける構造の強力な暖炉のおかげさまで衣類のほとんどは翌日までに乾かすことが出来た。

この日の経験を想定外で片づけることなく、冬山での防水対策は今後の課題としたい。

（上）戸台から丹渓荘までは単調な冬の河原あるきが延々と続く

１２月３１日

昨日より小屋の主人の動きが慌ただしい。小仙丈ヶ岳で男性が遭難しビバークで一夜を凌いで救助を待っているというのだ。

> 本日、単独で戸台大橋から入山し南アルプス小仙丈ヶ岳に向かった東京都渋谷区居住の男性 65 歳が道に迷い、家族から山小屋に救助要請があり、遭対協隊員及び山小屋管理人が捜索しましたが、天候不良により一旦捜索を中断しました。明日、県警ヘリ及び南アルプス北部遭対協隊長ほか 10 人、伊那警察署員 2 人で捜索を再開する予定です。
>
> （長野県警ニュース２４時　２０１２年１２月３０日より）

小屋の若女将曰く、今年の南アは積雪が多いという。１２月中旬に本山では兄弟２人が遭難死しているだけに、侮ることはできない。

天候は午前中晴れ模様、昼から雪という。可能なところまでという条件付きで仙丈ヶ岳に向かってアタックを試みた。

４合目までは順調に標高を稼ぐ。ここで南ア北部遭対協の方々に追いつかれ、道を譲る。核心は５合目大滝ノ頭までの急登に伴うラッセルだ。昨日の 2000m以上のエリアでの降雪でトレースは完全に消え去り、ワカンなしでの行軍は困難な状態になった。遭対協の方々と我々を含む一般の登山客合計２０名近くの足で次々とトレースが上へ上へと固められていく。

５合目を越えると一気に森林限界の吹きさらしの稜線だ。ここでアイゼンを装着。さきほどまで陽光が見えていた天候はホワイトアウトへと目まぐるしく変化した。軽装備の登山客は早々に退散を決め込まれ撤退されていった。私たちは小仙丈ヶ岳手前まで上がったものの、まったくの展望が聞かないこと、また気になる昨晩からの遭難者が 2800m付近で発見され、ボロボロの銀マットをザックにくくりながら自力下山を開始されたことも撤退要因となった。

山小屋の主人も出動しての救助活動となったが、一堂に五合目の休憩ポイントで「よかったよかった」の連発であった。しかし、内心はいかばかりであろうか。コンパスや GPS は持参していなかったのか、ツェルトやガスなど装備面に不十分さはなかったのか、天候の読みは？あらゆる判断が単独行には課せられるだけに他山の石とはできないと痛感させられた。

１３時過ぎには小屋に戻る。若女将からふるまって頂いた甘酒がとてもおいしかった。ゆっくりと休憩を取った後、幕営地の北沢駒仙小屋横まで移動を開始。

早い時間よりテントを設営し、くつろぐ。夕食は昨日のトン汁に続いてペミカン使用のカレー。山の就寝は早い。２０１２年は１９時の睡眠と共に翌年に突入した。

１月　１日

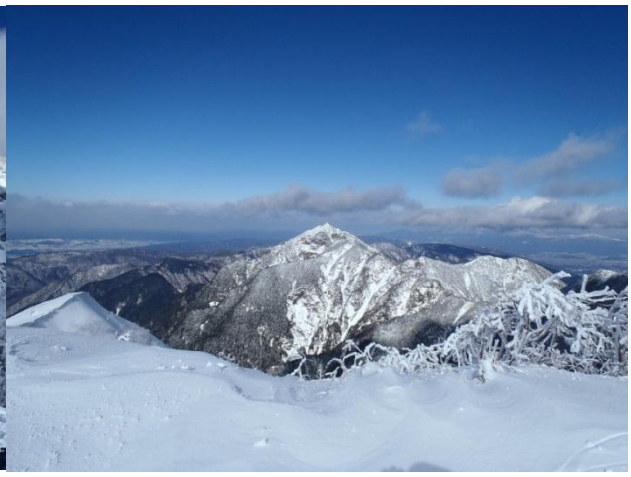
晴れ。アタック日和である。一昨日の長衛荘より行動を共にしてきた幕営組が今日は仙丈ヶ岳に再アタックするという。甲斐駒から富士山を拝みたいという思いと同時に、昨日の課題も気になるところ。逡巡した結果、冬季登頂の柳川さんには申し訳なかったが、甲斐駒を選択させてもらった。

仙水峠までは標高を上げるにつれて南アルプスの女王と謳われる仙丈ヶ岳の全貌があらわれた。しかし、稜線はガスが依然として切れ切れにかかっているようだ。

（左）早朝の幕営地より　（右）仙水峠から駒津峰までの稜線から甲斐駒ヶ岳を望む

駒津峰（2741m）までは基本的には樹林帯だが、ところどころで森林限界に入る。技術的に難しいところはない。

安定した天候のもと駒津峰で記念撮影をしたあと、いよいよ本峰にとりかかる。いくぶんかリッジ状の雪稜は続くものの、ピッケルとアイゼンワークを確実に行うことで十分にクリアできる範囲。

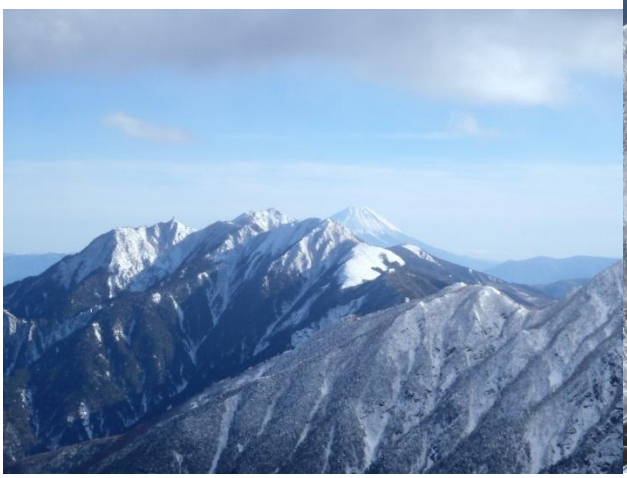


（左）駒津峰より甲斐駒ヶ岳　（右）駒津峰より鋸岳

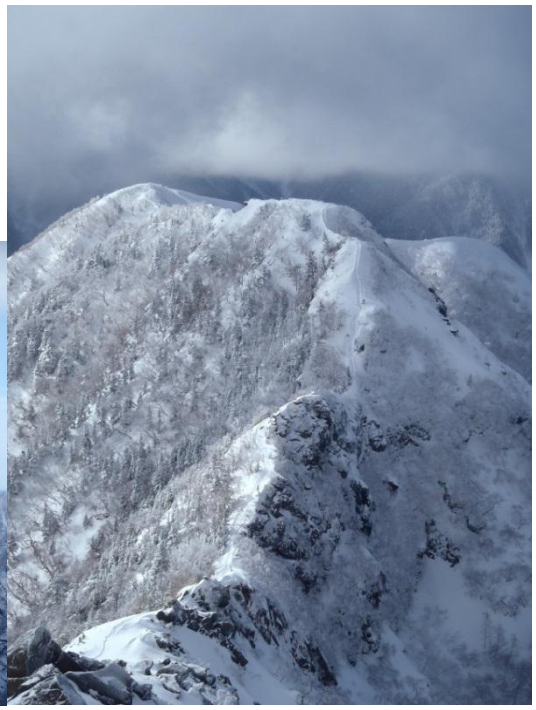
テーピングが不十分なせいか、右足を庇いながらの登頂となったが、１２時過ぎに登頂。鳳凰三山の合間から富士山を無事に拝むことが出来た。登頂者はほかに４～５名いた。

（左）柳川さん登頂

（右）皇紀２６００年を祀る頂上の祠



（左）鳳凰三山と富士山



（右）甲斐駒から駒津峰のリッジを俯瞰する

下りこそ慎重に行わなければならない。一週間前に蓬莱峡で行ったアイゼンワークの基本を思い出しながら腰に重点を置いた歩行を心がける。駒津峰への登り返しは柳川さんが先行して一歩一歩蹴り込みながら階段トレースをつくる。

樹林帯へ入ると一安心。昼から天候は荒れることもなく、１５時３０分ころに幕営地へ。

充実した山行を終え、夕食の準備（１日目に続いてトン汁）に取り掛かると同時に、昨日より気になっていた事案があった。設営時より隣に設営してあるテントが雪を被ったまま、その主を待っているのだ。昨日の遭難救助の男性に続いて、まさかという思いはあったが小屋の主人に確認したところ遭難した可能性が高いということだった。その証拠に甲斐駒からの下山途中にヘリによる谷筋の捜索が何度かにわたって繰り返されていた。

下山後に、西穂高、明神岳など北アルプスでの遭難事故が NHK で流れる中、私たちの隣のテントの主は助かったのだろうかと気になっていたが、杞憂に終わることなく、やはりそれは１月４日に現実に報道されることとなった。

南アルプス北沢峠一帯で山岳遭難(行方不明)と思われる事案の発生(伊那署)
１月１日、南アルプス甲斐駒ヶ岳の山小屋関係者から、「無人のテントが放置されている」との通報があり、所要の捜査を行ったところ、昨年 12 月 29 日から本年１月２日の間に甲斐駒ヶ岳と仙丈ヶ岳を登山するため、伊那市長谷戸台登山口から入山した大阪府大阪市居住の男性(年齢不詳)と連絡が取れないことから、同人が遭難したとみて捜索を行っています。
（長野県警ニュース２４時　２０１３年１月４日より）

１月２日

昨晩の甲斐駒登頂をクリアし、予備日をつかって仙丈ヶ岳へ登頂したいという柳川さんの願いに応えるべく、翌日を迎えることになった。しかし、テントから体を外へ放り出してみると小雪が舞っていた。しばらく出発を遅らせてはみたものの、回復する傾向にもない。

戸台への下山を決定し、１３時までに駐車地へ下山完了。

昼前であるのにすれ違う単独の登山客のパーセンテージの多いこと。私たちを含めて彼らの無事下山を祈るしかないが、ゴアテクスなどの登山道具のスペック向上、ネットでの容易な情報収集、それに山ブームが拍車をかけて単独行が増えているように思う。今回の入山中の遭難２件についても同様のことがあてはまるのだろう。一概に悪とはいえないけれども、十分にリスクを認識したうえで入山をしなければならないと肝に銘じた山行となった。

冬山は夏山以上に自然の脅威に対峙し、晒される時間が長い。冬山は幕営を含めて、基本は戦争のようなものだ。時間管理、荷物の選定、気象条件、日ごろの鍛錬、ギアの確実な操作…登頂に向けてこれらに打ち勝つ方法の一端を今回の山行で学ばせて頂いた。

仙流荘で４日間の汗と昼食をとり、奈良への帰路を取った。